令和6年度の学校経営目標とその目標を達成するための具体的な取組(最終評価)

岡山県立倉敷南高等学校

| 学校経営目標 | 分掌 | 本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動） | 評価基準 | 中間自己評価<br>中間期の達成状況と今後の課題 | 中間評価 | 最終自己評価<br>年度末の達成状況・課題とその方策 | 総合評価 | 総合評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1　学力向上と進路実現 | 教務課 | 【①教科指導と生徒指導の一体化】<br>＜具体的方策＞<br>・習熟度別授業を行っている教科に実施方法の集約をし、より効果的な運用を研究する。 | 学校自己評価アンケート＜生徒＞<br>「習熟度別授業・少人数授業は学力向上に役立っている」肯定的評価の割合<br>＜項目変更により参考値R5「先生は生徒の学力が伸びるよう授業改善に努めるなど、様々な教育活動に取り組んでいる。」生徒88.3%、保護者78.4%＞<br>生徒　　保護者<br>4：95%以上　4：90%以上<br>3：90% 以上　3：85%以上<br>2：80%以上　2：75%以上<br>1：80%未満　1：75%未満 | ・習熟度別授業を行っている教科に実施方法や実施形態、工夫をしている点などの調査のフォームを作成した。今後、教科に依頼し、2学期を目途に結果を集約をして共有する予定である。 | B | 【達成状況】<br>・習熟度別授業を行っている教科に実施方法や実施形態、工夫をしている点など調査のフォームを作成し回答をしてもらった。まとめたものを教科に配布し共有した。<br>学校自己評価アンケート「習熟度別授業・少人数授業は学力向上に役立っている」<br>肯定的評価割合　生徒87.5%　達成基準2　保護者80.1%　達成基準2<br><br>【課題と次年度への方策】<br>・習熟度の実施方法等をまとめることで、他教科の様子を把握することができ、各教科が次年度に向けての参考になることを期待する。次年度では、他県への学校訪問がある場合には、他校の実施状況等も収集し参考にしていきたい。また、習熟度クラスにおける成績推移のデータで傾向を分析したい。 | B | B |
| | 進路課 | 【②進路実現につながるキャリア教育プログラム】<br>＜具体的方策＞<br>・生徒の進路実現を支援するために3年間を見通した進路指導計画や進路指導プログラムの検証・改善をすすめ、LHRや総合的な探究の時間、面談などを通してきめの細かい進路指導を行う。<br><br>・実力考査や校外模試などの学力分析を行い、ICTの活用やリメディアル、個別課題の設定、総合型入試や推薦入試の対応など生徒個々の学習進捗や志望に応じた多様な学習指導のあり方の研究を進め、個別最適化された教科指導を実施していく。 | 学校自己評価アンケート＜生徒＞<br>・「進路学習や面談、集会等は、学習意欲の向上や進路目標決定に役立っている。」<br>　肯定的評価の割合＜項目変更により参考値R5「進路相談について、面談などできめ細かく丁寧に指導してくれる」 生徒　91.7%　・「総合的な探究の時間やLHR等が自らの進路設計に結びついている」 生徒　84.5%＞<br>4：93%以上<br>3：90%以上<br>2：80%以上<br>1：80%未満<br><br>・「自律的に家庭学習に取り組めている」＜項目変更により参考値R5「自分の家庭での学習状況は十分である」生徒　55.2%＞<br>4：70%以上<br>3：60%以上<br>2：55%以上<br>1：50%未満<br><br>・5教科の入試問題研究や、学力分析のための会議の実施回数の平均値で評価。<br>4：年7回以上<br>3：年6回以上<br>2：年5回以上<br>1：年5回未満 | ・進路指導プログラムに基づいた計画的な進路指導を実践している。進路LHRは各年次2回程度、外部講師による進路講演会も実施している。同時に、進路だよりを計画的に発行（1年10回、2年4回、3年8回いずれも前年並）し、タイムリーな情報発信と啓発活動を継続している。同時に、現状や実態に即した内容に進路指導プログラムの見直しを進めている。<br><br>・各教科より、学習の到達度に応じた学習教材や学習方法をきめ細かく指示、また、大型連休時期を中心に選択課題を多く組み入れるなど個別最適な学びを継続的に支援している。夏季休業中には3年次で「自律学習の会」を実施。さらに、各年次とも年2回のスタディサプリ到達度テストを実施、その結果をもとに2回の連動課題の配信を行っている。<br><br>・教科内で定期的な会議を開催し、実力考査の共同作問やその結果分析を行っている。<br>（学力分析、入試問題研究にかけた会議の回数；国4回、数7回、英4回、地歴4回、理6回　平均5回。また、5教科以外でも同程度の会議を実施している。） | B | 【達成状況】<br>・「進路学習や面談、集会等は、学習意欲の向上や進路目標決定に役立っている」<br>　肯定的評価割合 生徒83.4%　達成基準2<br>・「自律的に家庭学習に取り組めている」<br>　肯定的評価割合　生徒74.8%　達成基準4<br>・5教科の入試問題研究や、学力分析のための会議の実施回数の平均値で評価。<br>　5教科平均年9．6回　達成基準4<br><br>【課題と次年度への方策】<br>・達成状況は全体としては概ね良好であったが、年次ごとに見ると大きく減少している部分もある。集会に替えてリモートでの説明が増え、一方的な説明になっているものが多かったことは反省点であった。<br>・来年度に向けては面談の指針（シラバス）を作成し、教員に周知することで面談の充実を図りたい。併せて、面談ブースの整備も検討する必要がある。新課程初年度となった今年度の成果と課題を検証し、次年度以降の進路指導計画や進路指導プログラムの更新を行う。<br>・入試問題研究についても5教科に限らず全ての教科で積極的に実施できているが、この研究の成果を蓄積し、生徒へフィードバックしていく仕組みを作りたい。スタディサプリをはじめとするICTの活用を含めたリメディアルや個別課題の設定の更なる充実を図るため研究を進める。同時に個別最適化された学習環境の提供のため、葦岡セミナーなど課程外の講座の在り方も検討していく。 | B | |
| | 探究課 | 【③学力のすそ野づくり＜非認知能力の育成＞】<br>＜具体的方策＞<br>　総合的な探究の時間＜Minamix＞の充実を図る。<br>・課題研究＜Minamixゼミ＞について、日程の変更、中間発表の工夫を行い、生徒の活動の深化を図る。<br>・各活動について、評価の観点や評価方法について再検討し、生徒が自己評価を通して学びを深められるようにする。<br>・外部の発表会についての情報を提供し、生徒の参加を促す。 | ・学校自己評価アンケート＜生徒＞「総合的な探究の時間＜Minamix＞やLHR講演会を通して探究的な学びの機会が充実している」肯定的評価＜項目変更により参考値R5「総合的な探究の時間」やLHR等が自らの進路設計に結びついている」84.5%＞<br>4：85%以上<br>3：80%以上<br>2：75%以下<br>1：75%未満 | ・1年次ラーニングカフェで従来のカフェ方式に変更、また、インタビュー記事を作成することにより、地域の方からの学びを自分の言葉で書き直し、学びを深める取組とした。<br>・各活動について、評価の観点や評価方法について再検討まで実施できていない。今後、DX委員会や年次と連携しルーブリックとAi GROWの活用により生徒個人の変容及び、集団の変容がわかるものとしたい。<br>・校外での学びの機会を探究課内でも共有している。教師・生徒ともに機会を周知することで参加者増をはかる。参加者数　教員6名　生徒5名 | B | 【達成状況】<br>・学校自己評価アンケート＜生徒＞「総合的な探究の時間＜Minamix＞やLHR講演会を通して探究的な学びの機会が充実している」<br>肯定的評価割合　生徒全体83.4% 達成基準3<br>・探究の時間の評価についてはルーブリックを自己評価に活用できた場面もある。1年次では非認知能力の伸長を図る方法としてAi GROWを活用したが、本校独自の「身につける力」との連動ができなかった。<br>・外部と連携した講演会等の取組を自分事と関連づける方法を研究した。<br><br>【課題と次年度への方策】<br>・ルーブリックを活用し、生徒の自己評価をさせるための時系列の計画を作成する。 | B | |

令和6年度の学校経営目標とその目標を達成するための具体的な取組(最終評価)

岡山県立倉敷南高等学校

| 学校経営目標 | 分掌 | 本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動） | 評価基準 | 中間自己評価<br>中間期の達成状況と今後の課題 | 中間評価 | 最終自己評価<br>年度末の達成状況・課題とその方策 | 総合評価 | 総合評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>学力向上と進路実現 | 1年次 | 【②進路実現につながるキャリア教育プログラム】<br>基本的な生活習慣や学習習慣を確立させ、進路実現に向けて「高い志」と「粘り強さ」をもち、地道に努力する気質を養う。<br>＜具体的方策＞<br>・担任面談（年5回）を通して、生徒理解を行うとともに、教科面談や主任・副主任面談も行い、様々な視点や立場から生徒への助言を行う。<br>・共通課題や選択課題のパターンを柔軟に設定する。<br>・進路指導プログラムに沿って、系統的に進路指導を行う。また、年次集会や進路LHRで「高い志」を持つような講話を行う。 | 学校自己評価アンケート<br>・「悩んだり、困ったりした時に、先生は親身に相談にのり解決に向けて取り組んでくれる。」<br>＜項目変更により参考値 R5「悩んだり困ったりしたときに先生やスクールカウンセラー等に相談しやすい環境が整えられている」1年次 90.4%＞<br><br>・「進路学習や面談、集会等は、学習意欲の向上や進路目標決定に役立っている。」＜項目変更により参考値生徒 R5 1年次 83.7%＞<br><br>肯定的評価＜それぞれで＞<br>4：90%以上<br>3：85%以上<br>2：80%以上<br>1：80%未満 | ・担任面談を各クラス2回以上行い、生徒理解に努めた。文理選択や科目選択で悩む生徒も少なくないが、クラスの垣根を越えて様々なアドバイスを行った。<br>・課題に関しては入学後間もないということもあり、共通課題が主であった。後期は、生徒に「守・破・離」ということを意識させながら、徐々に自主・自律を促すような取組を行っていきたい。<br>・進路課と連携して、今年度新たに「岡山大学訪問」を実施した。直接自分の目で大学や学部を見ることができて、生徒にとっては大きな刺激になった様子である。後期に向けては、「進路」と「探究」の連携を図りながら、生徒の知的好奇心や高い志を醸成していく。 | B | 【達成状況】<br>学校自己評価アンケート<br>・「悩んだり、困ったりした時に、先生は親身に相談にのり解決に向けて取り組んでくれる」肯定的評価割合　生徒（1年次）90.2%　達成基準 4<br>・「進路学習や面談、集会等は、学習意欲の向上や進路目標決定に役立っている」肯定的評価割合 生徒（1年次）83.2%　達成基準 2<br>・担任面談（年5回）とは別に、担任以外の教員と面談する機会を確保し、年次全体で生徒をサポートする体制を整えた。<br>・探究課と連携して、今年度新たに「課題研究入門～おにぎりプロジェクト～」を実施し探究学習の充実を図った。生徒の感想からもクラスやグループのメンバーと協働的に活動できたことがうかがえた。次年度の課題研究につながるよい活動を行うことができた。<br>・希望者模試を128名の生徒が受験した。受験後も継続的に指導を行っており、「高い志」を持って取り組む集団となりつつある。<br><br>【課題と次年度への方策】<br>学校自己評価アンケート<br>「自律的に家庭学習に取り組めている」 生徒（1年次）66.7%<br>・学習習慣の定着については、家庭学習時間160分/日（平均、10月）であり、目標の210分/日（平均）と大きな差がある状況である。年次集会や進路学習で、学習意欲が向上するような取組を行ったものの、学習時間には結びついていないのが現状である。引き続き、様々な仕掛けを施し、生徒が主体的・自律的に学習に取り組むことができるようにしていく。<br>・1年次3学期のLHRで、生徒の「質問力」を向上させる活動を行った。前例踏襲ではなく、生徒の実態や状況を踏まえて様々な取組を試し、引き続き「自主自律を貫きながら高め合う生徒」の育成に励んでいきたい。 | B | B |
| | 2年次 | 【②進路実現につながるキャリア教育プログラム】<br>課題に頼らず、自らの目標に向け計画して自律した学習に取り組むことの出来る生徒の育成を目指す。<br>＜具体的方策＞<br>年間数回、課題のない期間を設け、自らの意思により学習したことを記録として残すことで、自分に対する意識付けと個別の目標の設定につなげる。 | 課題のない期間に実施した学習実態調査における週210分以上学習した生徒の割合。<br>4：70%以上<br>3：55%以上<br>2：40%以上<br>1：40%未満 | 6月の学習実態調査では、週210分以上学習した生徒は、46.1%となっている。塾の学習時間も含めれば、56.5%と数値が上昇する。全般的には、真面目な生徒が多く努力をしている傾向が見られる。一方で、学習時間が十分に定着していない生徒もいることも事実であり、一層の意識を高める呼びかけを進めていく。また、学習時間の多い生徒でも、成績に反映が見られない生徒については、面接などにより状況確認とその対応などにつとめる。 | B | 【達成状況】 週210分以上学習者<br>6月の学習実態調査　46.1%　　塾込み 56.5%<br>10月の学習実態調査　47.0%↑　塾込み 61.2%↑　達成基準3<br>例年よりも放課後に教室で学習している生徒が多く見られる。前向きに取り組もうという意欲が見られる生徒も多く、必ずしも課題が課されていなくとも、何らかの学習に自ら取り組んでいる傾向が見られる。<br>【課題と次年度への方策】<br>文理での学習時間の差が生じており、理系の奮起を促すような仕掛けが必要と考える。教科バランスも良いと言いがたい面も見られるため、この部分の改善に意識して指導する必要があると考えている。<br>また、学習時間は多いものの、成績に反映が見られない生徒についての対応をより進める必要性を感じる。 | B | |

令和6年度の学校経営目標とその目標を達成するための具体的な取組(最終評価)

岡山県立倉敷南高等学校

| 学校経営目標 | 分掌 | 本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動） | 評価基準 | 中間自己評価<br>中間期の達成状況と今後の課題 | 中間評価 | 最終自己評価<br>年度末の達成状況・課題とその方策 | 総合評価 | 総合評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1　学力向上と進路実現 | 3年次 | 【②進路実現につながるキャリア教育プログラム】<br>生徒それぞれの進路実現のため、面談をする機会を多くとり、年次団で統一した進路指導を行う。<br>＜具体的方策＞<br>・必要に応じて適切な時期での担任との面談<br>・個別の教科指導や教科面談<br>・難関大志望者に対する指導＜集会・講座＞<br>・クラス間の情報共有のための担任会議<br>・進路カレンダーに沿った系統的な進路指導<br>・自律した学習を促進させるためのアドバイス | 学校自己評価アンケート＜生徒＞<br>「進路学習や面談、集会等は、学習意欲の向上や進路目標決定に役立っている。<br>＜項目変更により参考値R5　生徒　88．1%＞<br>4：91%以上<br>3：87%以上<br>2：83%以上<br>1：83%未満 | ・生徒個々の進路実現に向けて4月（年度当初）や6月（検討会前）だけではなく、面談を随時実施している。少しずつ進路に対する意識が高まってきたように感じる。また、教科等で悩みがある生徒には教科面談を行っている。今後も面談により丁寧な進路指導を心がけたい。<br><br>・進路カレンダーに沿った、進路・キャリア教育の計画を進行している。また、進路講演会で外部講師の話を聞き、具体的な進路実現のための方策について知識を得た。<br><br>・自主的に学習する姿が見受けられるようになった。「一意専心自律学習の会」では100名近い生徒が参加した。進路志望に応じて、自らの課題を解決すべく自律した生徒を育てたい。 | B | 【達成状況】<br>学校自己評価アンケート<br>「進路学習や面談、集会等は、子どもの学習意欲の向上や進路目標決定に役立っている」肯定的評価割合　生徒（3年次）89.3%　達成基準3<br><br>参考値ではあるが昨年と比べても上昇していることがわかる。担任による定期的な面談とともに、随時必要なときに追加の担任面談・教科面談等をすることで系統的な進路指導ができた。<br><br>【課題と次年度への方策】<br>【課題】<br>自律した学習ができていない生徒がいる。<br>【方策】<br>低年次から、家庭での学習方法の指導であったり、個々に応じた課題の与え方などを工夫することによって、自ら学ぼうとする生徒の育成が大切である。それには進路学習やキャリア教育なども不可欠であり、総合的にどのような生徒を育てるかというビジョンを教員が共有することが大切であろう。<br>また、受験前にやる気を失う生徒も少なからずいるので、心のケアをする必要がある。 | B | B |
| | 学力向上委員会 | 【①教科指導と生徒指導の一体化】<br>全員が授業力を含めた教科指導力を向上させ、生徒の学力向上に資する。<br>＜具体的方策＞<br>〇全体テーマ「自律した学習者の育成」について、各教科で課題を明確化 し、<br>具体的な研究テーマと研究計画を立てる。教科全員で研究計画を実践する。<br>・授業公開期間を2回設け、互見授業を促進する。2回目の期間中に各教科で研究<br>授業を行い、外部講師からの助言を得る。<br>・委員会内で策定した授業アンケートで、研究の事前・事後で研究テーマにおける授業<br>改善の成果を把握する。授業力向上研修で共有する。<br>・各教科で教科会議の時間を中心に、入試研究(6教科の試験のみならず小論文・面接・実技等まで含む)に取り組む。 | 策定した授業アンケートにおける事後の上昇値<br>＜1～5の選択、全教科平均で＞<br>4：0.5以上<br>3：0.25以上<br>2：0.0以上<br>1：0.0未満＜マイナス値＞ | 全員が教科指導力を向上させる取組を行っている。<br>＜具体例＞<br>・第1回授業公開期間には、常勤教員が全員公開授業を設定し（一覧表を作成し）、全員が1回以上の授業参観を行った。<br>・第1回授業公開では、可能な限り全員が、一人一台端末の活用をその授業内に設定するよう努めた。そのための研修会を実施した。<br>・全体テーマを設定し、その後、各教科で研究テーマと研究計画を立てた。<br>・委員会内で策定した授業アンケートを実施した。11月にも同じ問いでアンケートを実施予定で、研究の事前・事後での成果を把握する予定。 | B | 【達成状況】 達成基準1<br>第1回授業アンケートと第2回授業アンケートの差異（全年次・全教科対象：最高4／最低1）<br>(1)「この教科では授業の目標を理解し、自分で考えて学ぼうとしている」3.49 ⇒ 3.45<br>(2)「この教科の授業で自分で考え学んだ内容をクラスメイトなどと共有している」3.29 ⇒ 3.26<br>(3)「この教科の授業で自ら考え学ぶ力がついてきていると感じられる」3.29 ⇒ 3.30<br>・上記共通項目3つについては、大きな変容は見られなかったが、3つとも高い数値を維持している。各教科の独自質問を含め、集大成の3年次で数値が上がっている項目が多い。好ましい結果と捉えている。<br>・一人一台端末の活用を含め、多くの先生が新たな取組を行った中で、生徒はよくついてきた。<br><br>【課題と次年度への方策】<br>・アンケートの実施方法について改善したい。生徒へ目的の周知、実施時期、設定する質問の内容（現状を上手く反映しているか）、質問の精選（数）、教員・生徒間の意識の差、より長期的な変容についての調査など | B | |

令和6年度の学校経営目標とその目標を達成するための具体的な取組(最終評価)

岡山県立倉敷南高等学校

| 学校経営目標 | 分掌 | 本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動） | 評価基準 | 中間自己評価<br>中間期の達成状況と今後の課題 | 中間評価 | 最終自己評価<br>年度末の達成状況・課題とその方策 | 総合評価 | 総合評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2<br>高い人間力の育成 | 生徒課 | 【①自己指導能力を高める生徒指導】<br>【③人権意識や規範意識、公共心等の育成】<br>「安心安全で快適な学びの場の実現」<br>ⅰ主体的な生徒会活動による集団づくり・リーダー育成。<br>ⅱ校内美化の推進<br>ⅲひらかれた相談体制の構築と生徒の多面的理解及び情報共有。<br><ⅰ具体的方策><br>・集会ごとにM-PRiDE手帳を活用し、「生徒心得をもう一度」を合い言葉に、南高生としての自覚と責任を持った意思決定・行動選択ができるように導いていく。その上で生徒の主体的な生徒会活動を応援していく。<br><ⅱ具体的方策><br>・通常清掃、吉岡川クリーン大作戦、大掃除、整美委員による安全点検、保健委員による水質調査など生徒による環境整備。<br><ⅲ具体的方策><br>・教職員研修の実施、生徒情報共有の強化・深化。リンゴファイルの活用促進。 | 学校自己評価アンケート<br>ア「学校には、仲間と話し合ったり、協力したりして生徒の自己成長につながる機会がいろいろある。」<項目変更により参考値R5「本校には仲間と話し合ったり、協力して作業をしたりして学ぶ機会が多くある」 生徒 96.3%><br>イ「学校では、命の大切さや、社会のルールや日常生活のマナーについて、いろいろな場面で学ぶ機会がある。」<項目変更により参考値R5[社会のマナーやルール・校則について、指導が適切に行われていると感じる」生徒 89.4%><br>ウ「悩んだり、困ったりした時に、先生は親身に相談にのり解決に向けて取り組んでくれる。」<項目変更により参考値R5「悩んだり、困ったりしたときに、先生やスクールカウンセラー等に相談しやすい環境が整えられている 生徒 72.1%><br><br>肯定的評価<項目ア・イ>　　肯定的評価<項目ウ><br>4：90%以上　　4：80%以上<br>3：85%以上　　3：75%以上<br>2：80%以上　　2：70%以上<br>1：80%未満　　1：70%未満 | ⅰ主体的な生徒会活動による集団づくり・リーダー育成。<br>委員会・部活動・葦岡祭実行委員会等の主体的な生徒会活動を活発に行っている。行事予定を配付し、M-PRiDE手帳の活用を促した。全校及び学年集会で手帳の内容を周知徹底した。今後はリーダー育成に取り組んでいく。<br><br>ⅱ校内美化の推進<br>生徒会を中心とした吉岡川クリーン作戦や、整美委員を中心とした中庭花壇の整備・清掃チェックを行った。また、保健委員による水質調査など生徒による環境整備体制が整いつつある。今後は生徒が主体的に課題解決できる委員会活動を展開していく。<br><br>ⅲひらかれた相談体制の構築と生徒の多面的理解及び情報共有。<br>自殺予防のための教職員研修を実施した。生徒指導の情報共有・リンゴファイルの活用促進など、生徒の多面的理解を深めることができた。校支援でSC・SSWの相談日を保護者にお知らせした。また生徒へのSC・SSWへの相談を促し、相談しやすい環境を整えることができている。今後は保護者及び教職員の教育相談研修を進めていく。 | B | 【達成状況】<br>・学校自己評価アンケート<br>ア「学校には、仲間と話し合ったり、協力したりして生徒の自己成長につながる機会がいろいろある」 肯定的評価割合　生徒全体　94.8%　達成基準4<br>イ「学校では、命の大切さや、社会のルールや日常生活のマナーについて、いろいろな場面で学ぶ機会がある」 肯定的評価割合　生徒全体　86.0%　達成基準3<br>ウ「悩んだり、困ったりした時に、先生は親身に相談にのり解決に向けて取り組んでくれる」 肯定的評価割合 生徒全体　87.9%　達成基準4<br>（ⅰ）主体的な生徒会活動による集団づくり・リーダー育成については、項目アの評価にて高い数値が出ている。葦岡祭等の生徒会行事への満足度の高さがこの評価へつながっていると考えられる。生徒が立案し、実行できる機会を多く設けた結果である。<br>（ⅱ）校内美化の推進については、委員会を中心に様々な環境整美活動を行っているが、一般生徒の意識改革まではつながっていないと考える。<br>（ⅲ）開かれた相談体制の構築と生徒の多面的理解及び情報共有については、昨年度と比べ項目ウの評価でかなり高い数値が出ている。日頃の担任による生徒観察・声かけ、年次団の情報共有がしっかりとなされており、教育相談体制が確立された結果であると考える。<br><br>【課題と次年度への方策】<br>（ⅰ）生徒の意見や声を学校行事等へ反映させていく体制強化が課題である。生徒会を中心に生徒がもっと議論できる場を設けていく。<br>（ⅱ）生徒会→委員会→全校生徒→生徒会という形で生徒会組織が活発になれば、ルールやマナーについて学ぶ機会が増えてくる。まずは生徒会の意識改革からスタートしたい。<br>（ⅲ）不登校生徒数の増加が課題である。未然防止はもちろん、早期発見・早期対策が重要であると考える。そのために教職員の教育相談研修を進めていく。 | A | B |
| | 総務課 | 【②国際感覚を養うグローバル活動「グローバルプログラム」の実施】<br><具体的方策><br>○国際理解・国際交流の機会の充実と体系化<br>・カシミア高校訪問<事前事後学習含めた>の実施。カシミア高校オンライン交流の継続。<br>・カンボジア研修の企画検討<br>カンボジアへの興味を高めるグローバル講演会の実施。<br>・上記2つの学校主催海外研修を軸としたプログラムの体系化。<br>他の選択肢としてのGLOBAL STUDIES PROGRAMや 県・市・その他団体主催の<br>海外研修の機会の提供。<br>○多様性を受容する姿勢の育成<br>・カシミア高校訪問<他の海外研修も>生徒　の成果発表の場を設け、学校全体へ波及させる。<他生徒・各教科へ><br>・グローバル講演会のテーマに「多様性受容」を盛り込む<br>○グローバル活動をきっかけにした意欲的な英語学習。<br>・<英語科と連携して>英検への積極的な受験・準備を促す。<br>・海外経験を生かす進学のサポートを行う。 | 本校が主催するまたは案内する<県・市・その他団体の>海外研修・海外留学へ参加する生徒の数<<br>※倉敷留学を含める><br><R5　61名><br>4：60名以上<br>3：40名以上<br>2：20名以上<br>1：20名未満<br><br>今年度の英語検定受験者数<のべ><br><R5　262名><br>4：320名<br>3：260名<br>2：200名<br>1：200名未満 | 「グローバルプログラム」を実施している。<br><具体例><br>・カシミア高校訪問研修を6年ぶりに実施し、事前・事後研修を含めた体系化ができた。帰国後の発表の場を作り、他の生徒への波及効果も期待できる。<br>・カンボジア研修の企画検討を始め、来年度の実施を確定できた。<br>・上記2つの研修旅行を軸とした2年間で流れる「グローバルプログラム」ができつつある。<br>・カシミアへ行けなかった生徒用に、他の選択肢としてのGLOBAL STUDIES PROGRAMや 県・市・その他団体主催の海外研修の機会を提供したが、生徒の参加は少なかった。GLOBAL STUDIES PROGRAMについては、実施時期について再考が必要である。最少催行人員に届かなかった。<br>・今後は、カシミア研修やカンボジア研修の経験を、英語等を学ぶ意欲に変える工夫が必要である。<br>・第1回英検準会場125名受験、第2回134名受験予定である。 | B | 【達成状況】<br>・カシミア高校訪問研修へは申込者38名、選考後20名が渡航、事前事後研修も体系的に実施できた。<br>・他団体の海外短期研修・留学への勧誘がうまくいかず（倉敷留学、県教委主催、倉敷市主催など）、カシミアを除いて夏季3名、春季8名が渡航した（する）にとどまった（計31名）。倉敷留学は応募が少なく中止し、県教委主催プログラムは最少催行人員に満たず、参加を諦める生徒が数名いた。　達成基準2<br>・次年度カンボジア研修の企画を開始した（年度末までには詳細を決定）。グローバル講演会は、カンボジア研修参加者募集も視野に入れて実施予定。<br>・英語検定準会場、第1回125名、第2回134名が受験した（計259名）。その他にもS-CBTを含めた本会場受験の生徒が多数いると推測される。葦岡セミナーで、英検講座を計4回（それぞれで準2級と2級の別講座）実施した。達成基準3<br><br>【課題と次年度への方策】<br>・カシミア高校との交流については、派遣・受入の時期以外も活発にしていきたい。カシミア交流が限られた生徒間にとどまっている。姉妹校交流を学校全体へ波及させたい。まずオンライン交流を定期的（計画的に）に実施するため、2～3月に来年度の年間計画を相手校と策定したい。また、特定の1週間を「カシミアウィーク」（仮称）とし、学校全体で交流を促進する企画を検討したい。<br>・他団体の海外短期研修・留学への参加者募集については、年度当初に一覧を提示することで、より体系的に生徒への紹介を行い、渡航人数の増加につなげたい。倉敷留学については、コロナ禍明けとなり、ニーズが減っているため、次年度以降の募集は停止したい。<br>・カンボジア研修についても、カシミア研修同様、募集・選考・渡航・事前事後学習などの流れを体系的に実施したい。<br>・英語検定については、英語科と連携して第3回も準会場で実施したい。また、例年決まった時期に英検取得状況の把握をする体制を構築したい。 | B | |

令和6年度の学校経営目標とその目標を達成するための具体的な取組(最終評価)

岡山県立倉敷南高等学校

| 学校経営目標 | 分掌 | 本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動） | 評価基準 | 中間自己評価<br>中間期の達成状況と今後の課題 | 中間評価 | 最終自己評価<br>年度末の達成状況・課題とその方策 | 総合評価 | 総合評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2<br>高い人間力の育成 | 1年次 | 【①自己指導能力を高める生徒指導】<br>多様性を理解・尊重し、自分や他人を大切にし、調和の取れた言動をとることができる生徒を育成する。また、自主的・自律的な行動をとり、互いに高め合うことのできる集団をつくる。<br>＜具体的方策＞<br>・授業や行事で、他者と関わる機会を多く設定し、協働する姿勢を育成する。<br>・積極的な挑戦の機会を設け、失敗経験も肯定的に捉えさせ、次につなげさせる。<br>・段階的に年次行事の運営等を生徒に任せていき、生徒が活躍する機会を増やしていく。 | 学校自己評価アンケート<br>・「学校には1人ひとりが尊重され、周りから受け入れられていると感じられる雰囲気<br>がある。」＜生徒肯定的評価 R5 1年次 87.7%＞<br>・「学校には、仲間と話し合ったり、協力したりして自己成長につながる機会がいろいろ<br>ある。」＜生徒肯定的評価 R5 1年次 97.0%＞<br><br>肯定的評価＜それぞれで＞<br>4：90%以上<br>3：85%以上<br>2：80%以上<br>1：80%未満 | ・年次独自のLHRでは、人間関係・集団形成の特別活動等を行い、クラス内の信頼関係を強めることができた。<br>・日々の授業や各種行事（Minamix Start-Upプログラム、word cup、葦岡祭等）で、クラスの色を出しながら、一致団結して取り組むことができている。<br>・後期に向けては、生徒のがんばりを褒めながら、今後更に積極的に挑戦することができるような声かけを行っていきたい。 | B | 【達成状況】<br>学校自己評価アンケート<br>「学校には1人ひとりが尊重され、周りから受け入れられていると感じられる雰囲気がある」 肯定的評価割合　生徒（1年次）90.9%　達成基準 4<br>「学校には、仲間と話し合ったり、協力したりして自己成長につながる機会がいろいろある」 肯定的評価割合　生徒（1年次）96.6%　達成基準 4<br><br>・年次全体で、丁寧に生徒・保護者対応を行うように心がけた。その結果、よい信頼関係を築くことができ、一人ひとりを尊重するような雰囲気をつくることができた。<br>・授業や総合的な探究の時間等で、協働的に学ぶ環境を提供することができた。特に、今年度新たにLHRで「ラーニング・メソッド」を行い、クラスの枠を超えて、他者と関わりを持たせた。<br>・読書会やスポーツ大会、百人一首大会は、委員会や有志の生徒が運営した。生徒一人ひとりが任された場面でリーダーシップを発揮し、よりよい集団となりつつある。<br><br>【課題と次年度への方策】<br>学校自己評価アンケート<br>「本校の教育目標（「自律・友愛・進取」の精神を実践し、グローバル社会で貢献・活躍できる人を育てる）を理解して、行動している」 生徒（1年次）79.8%<br><br>・生徒の日々の取組が、「自分のため」で終わっており、「他者のため」という視点が不十分なようである。来年度は上級生として、下級生の手本となり、全体のために奉仕できるように声かけを行っていく。また、課題研究においても、世界や日本全体に目を向けさせて、社会のために何ができるのかを考えさせていきたい。 | A | B |
| | 2年次 | 【①自己指導能力を高める生徒指導】<br>＜具体的方策＞<br>年2回の年次生徒企画運営のLHRを実施し、企画運営側と実施者側のそれぞれの学校生活での充実をはかり、円滑な人間関係づくりをするとともに、企画運営側の協議力・協調性の育成を図る。 | 企画後にアンケートを実施、企画運営側と実施者側の満足度の割合。<br>・企画運営を担当する生徒の満足度の割合<br>・企画実施後の2年次生徒全体の満足度の割合<br>※　両者の平均評価を最終評価とする。<br>4：80%以上<br>3：60%以上<br>2：40%以上<br>1：40%未満 | 現在、LHR企画特別委員を募集し、2度の話し合いを行った。10名（各クラス1名）程度の委員を想定していたが、現在6名の立候補があり話し合いを行っている。具体的内容については委員の間で話し合わせて、ただ楽しいだけではなく考えることをテーマに企画検討している。9月中には明確な日程と内容についてとりまとめる。 | B | 【達成状況】<br>・11月にLHR企画特別委員の企画により紙飛行機競技会を実施した。若干、風があったり、定期考査前であったりしたが、アンケート回答生徒の69.5%の生徒が満足・とても満足と回答し、やや不満・不満と回答した生徒は30.5%となった。否定的な意見としては定期考査前であったことの意見が中心であった。<br>・LHR企画特別委員についての満足度は、6名全員満足・とても満足と回答した。評価基準で計算した場合、84.75%が肯定的評価であった。<br>両者の平均評価77.1% 評価基準3<br><br>【課題と次年度への方策】<br>学習をしなければならないという意欲が高いことは、喜ばしいことであるが、『勉強ができればそれでよし』ではなく、自律的な活動に加えて『勉強もできる』ということの大切さに、気づかせる仕掛けが足りなかった。<br>現在、もう一つの企画として来年度の葦岡祭文化の部での3年次の取組について検討をしているところである。今年度末には1つの方向性が示すことができるよう進めているところである。 | B | |
| | 3年次 | 【①自己指導能力を高める生徒指導】<br>生徒が、自分と他人とのあり方について自分事として考え、自らが尊重されていると思えるようにするために年次集会や年次通信等で活動や取組を取り上げ、自己肯定感を高めるようにする。<br>＜具体的方策＞<br>・年次集会等の振り返り。＜生徒代表者の発言など＞<br>・生徒の活躍・表彰する機会の創出。 | 年次集会で振り返りをする方法として生徒代表者に発表させた割合<br>4：100%<br>3：80～99%<br>2：50～79%<br>1：50%未満 | ・リモートではない年次集会においては生徒代表者に振り返りをしてもらっている。リモートの場合は各自でform入力をしてもらった。今後も自分事として考える意義を教えたい。<br><br>・葦岡祭文化の部知力部門の企画運営は文化委員に任せ、責任をもって進めてくれた。生徒が活躍できる企画は今後少ないが、年次集会で自己肯定感を高めるような話をするなどの取り組みをしていきたい。 | B | 【達成状況】<br>1学期は生徒代表者に話をしてもらったが、2学期以降には、振り返りはできなかった。自分事として考えることを徹底できなかった。<br>達成基準2<br><br>【課題と次年度への方策】<br>【課題】<br>自分事として考えられない生徒が見受けられる。<br>【方策】<br>年次での取組で自分事として考える機会を増やす。話を聞くだけではなく協働することで得られるものがあるはずである。そうすれば自己肯定感も高まると考えられる。 | B | |
| | 市民教育委員会 | 【③人権意識や規範意識、公共心等の育成】<br>自他を大切にした言動のできる生徒の育成を図る。<br>＜具体的方策＞<br>・生徒一人ひとり大切にし、生徒の人権を尊重した言動を行うことができるよう<br>研修等を実施する。 | 学校自己評価アンケート<br>・「学校には1人ひとりが尊重され、周りから受け入れられていると感じられる雰囲気が<br>ある」＜R5生徒全体　肯定的評価：85.3%＞<br>4:90%以上<br>3:85%以上<br>2:80%以上<br>1:80%未満 | ・教育庁人権教育生徒指導課による訪問研修において、生徒からの相談等への応対の仕方（受容的な話の聞き方等）について研修を行った。日頃の生徒対応等へ生かしていきたい。 | B | 【達成状況】<br>令和6年度学校自己評価アンケート<br>・「学校には1人ひとりが尊重され、周りから受け入れられていると感じられる雰囲気がある」<br>肯定的評価割合　生徒評価86.7%　達成基準3<br>前年度より1.4ポイント上昇しており、担任による丁寧な面談や授業等における1人ひとりを大切にする声かけ等が肯定的評価につながっていると考えられる。<br>【課題と次年度への方策】<br>各年次ともに引き続き丁寧な面談や一人ひとりの人権を尊重した接し方を続けていくよう呼びかけていく。 | B | |

令和6年度の学校経営目標とその目標を達成するための具体的な取組(最終評価)

岡山県立倉敷南高等学校

| 学校経営目標 | 分掌 | 本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動） | 評価基準 | 中間自己評価<br>中間期の達成状況と今後の課題 | 中間評価 | 最終自己評価<br>年度末の達成状況・課題とその方策 | 総合評価 | 総合評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3　開かれた学校づくり | 総務課 | 【①信頼関係を築くための情報共有の実践】<br>＜具体的方策＞<br>〇連携強化のための中学校訪問・塾訪問の実施<br>・3月入学前の中学校訪問（生徒課）の内容を踏まえ、入学後の中学校訪問の実施形態を検討する。<br>・2、3学期の中学校訪問を実施する。（総務課を中心に）<br>・塾訪問については他の課の協力を得て、できるだけ多く実施する。<br>〇夏季・秋季オープンスクール、保護者対象説明会の充実。<br>・広報活動において、在校生の主体的な関わりを促す。<br>・保護者対象説明会の内容を一新し、質疑応答の時間を確保する。<br>〇ホームページにおける持続的な情報発信<br>・ブログの更新を中心に、ホームページでの情報発信を頻繁に行う。<br>・ブログに載せる楽しい記事＜コンテンツ＞の作成を、学校全体に依頼する。<br>・ホームページ閲覧数の推移を注視する。 | 本校への一般入試志願倍率＜1次調査倍率＞<br>＜R06 1.08 / R05 1.20 / R04 1.37＞<br>4：1.15以上<br>3：1.10以上<br>2：1.05以上<br>1：1.05未満 | 情報共有の実践に取り組んでいる。<br>＜具体例＞<br>・1年次との連携で、オンデマンドの形で中学校訪問を実施した。13中学校から訪問希望が出た。<br>・大手塾の説明会に参加し、最新の情報を提供するよう務めている。<br>・オープンスクールでは、入試の倍率や新入生アンケートの結果を踏まえて、中学生・保護者目線の説明を増やしている。<br>・オープンスクールでは、生徒の分担箇所を増やし、中学生が在校生と接する機会を例年以上に提供した。<br>・総務課のみならず、学校全体にブログ記事の作成を依頼し、持続的な情報発信に繋がっている。<br>・ホームページ閲覧数、7月までで県内第6位。 | B | 【達成状況】<br>・本校への一般入試志願倍率＜1次調査倍率＞は、1.36であった。県内大規模普通科高校ではトップクラスの数値となった。学校案内作成に早めに着手したり、中学校訪問を再開したり、オープンスクールでの在校生の役割を増加させたり、ホームページの内容の改善・ブログ記事の充実などを図ってきたことが功を奏した。中でも、オープンスクールや学校説明会等で、中学生・保護者が関心を寄せる（新入生アンケートから）現在の「校風」の説明に時間を割いたことが効果的であったと考える。その際、本校の学力向上の取組や生徒会・部活動の自主的な活動などを紹介し、在校生・教員ともに学校を良くしていこうとする姿勢を強調した。<br>達成基準4<br><br>【課題と次年度への方策】<br>・学校全体にブログ記事の作成を呼びかけたが、掲載記事に偏りがあるため、より広く記事の作成依頼をしていきたい。<br>・学校案内や学校説明会では、中学生・保護者のニーズを注視してそれに見合う内容を増やすなど、年度ごとに柔軟に対応したい。 | A | A |
| | 探究課 | 【②保護者・地域・関係機関等との連携】<br>＜具体的方策＞<br>・「総合的な探究の時間＜Minamix＞」の活動において、地域との連携、保護者への情報発信を進める。<br>ⅰ探究課の活動についてホームページでの情報提供をより充実させる。<br>ⅱ各講演会、地域連携活動、Minamixゼミ等で、卒業生、地域人材、大学教員の活用を進める。<br>ⅲ中学校学習ボランティア等の活動を通して、地域に貢献する。<br>ⅳ課題研究の中で、社会に貢献する活動への取組が見られる。 | ・中学校学習ボランティア等への生徒の参加<br>＜参考：R5年度新田中学習ボランティア23名参加＞<br>4：20人以上<br>3：15人以上<br>2：10人以上<br>1：10人未満 | ・探究課の活動についてホームページでの情報提供は5回（東大講座・　母校訪問・ラーニングカフェ・事業所訪問・倉敷散策）<br>・卒業生、地域人材、大学教員の活用については、現在情報収集の段階でもある。、同窓会や年次と連携をはかり、中間発表時の卒業生アドバイスを成功させたい。<br>・中学校学習ボランティア等の活動を通して、地域に貢献する。<br>　学習支援ボランティア参加者数　葦高小学校：20名、新田中学校　46名<br>　募集時の問題や生徒指導について次年度に向けて解決する。<br>・課題研究の「社会に貢献する活動」への取組について情報収集が十分ではない。今後、年次や各担当と情報共有をする。 | A | 【達成状況】<br>学習支援ボランティア等参加者数：新田中学校46名　葦高小学校20名　達成基準4<br>学習支援ボランティアに期待以上の生徒が参加し、目標を達成した。懸案となる保険等の対応についても本校での対応が可能となる見込みである。次年度からもできるだけ多くの生徒が参加できるように、生徒への案内や事前指導を充実させていきたい。<br><br>【課題と次年度への方策】<br>学校自己評価「学習面やボランティア活動等で、地域と連携する機会がいろいろ設けられている」について生徒は67.3%、保護者は68.6% であった。実際には昨年度以上の生徒が校外で活動したが、学校自己評価に反映しているとはいいがたい。事前に意義等の説明が必要である。 | A | |

令和6年度の学校経営目標とその目標を達成するための具体的な取組(最終評価)　　岡山県立倉敷南高等学校

| 学校経営目標 | 分掌 | 本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動） | 評価基準 | 中間自己評価<br>中間期の達成状況と今後の課題 | 中間評価 | 最終自己評価<br>年度末の達成状況・課題とその方策 | 総合評価 | 総合評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4　教員のウェルビーイングの向上 | 総務課 | 【②協働的な教職員組織】<br>＜具体的方策＞<br>・協働的な組織運営と業務の効率化のため、教務課や進路課、英語科等との連携を図る。<br>・年間計画をもとに中学校・学習塾の訪問を調整企画する。訪問は1年次団や管理職、主幹教諭、教務課、進路課などの協力を得て広く、効率的に実施する。<br>・PTAと連携を密にして、PTA（保護者）と円滑な協力体制を築き、その支援・協力を得る。 | 学校自己評価教職員肯定的評価<br>・「学校は心理的安全性が保たれていて、意見が言いやすい環境となっている」<br>＜項目変更により参考値R5「風通しの良い職場作りや働き方改革が進んで<br>いる」教職員73.4%＞<br>4：75%以上<br>3：70%以上<br>2：65%以上<br>1：65%未満<br>・「学校は様々な教育活動にチームワークを意識して取り組み、各課や年次などの連携<br>がとれている」<br>＜R5　教職員77.2%＞<br>4：80%以上<br>3：75%以上<br>2：70%以上<br>1：70%未満<br>・「学校は、教育活動のPDCAサイクルが回り、その改善が進んでいる」<br>＜項目変更により参考値R5「カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れ、<br>教育活動のPDCAサイクルが回り、その改善が進んでいる」教職員70.9%＞<br>4：75%以上<br>3：70%以上<br>2：65%以上<br>1：65%未満 | 協働的な組織づくりに取り組んでいる。<br>＜具体例＞<br>・総務課「グローバルプログラム」において、英語科と連携し、英検対策講座を実施している。<br>・中学校訪問については1年次と連携した。学習塾訪問については現時点では総務課が行っているが、2学期以降は他の課の協力を仰ぎたい。<br>・PTAとの連携は密にできており、葦岡祭では多大な支援をいただいた。 | B | 【達成状況】<br>・英語検定や中学校訪問以外にも、入学式・卒業式、PTA活動、オープンスクールやブログ記事作成等の広報活動、グローバルプログラムの実施など、多岐にわたって他の課・科・年次等と連携してきた。お互いの意見を尊重し合って、よりよい協力体制へと改善している。<br><br>【課題と次年度への方策】<br>・PDCAサイクルについては、十分な時間が取れていない。コロナ禍明けもあり、グローバルプログラムはじめ多くの業務が一気に動き出した中で、課のメンバーが集まる機会を増やし、業務の整理と体系化を進めていきたい。<br>・PTA活動については、葦岡祭で大きな役割を担っていただいた。次年度は、葦岡祭のプログラム、実施の流れ等が大きく変わる可能性がある中で、PTAに関わっていただく内容・範囲を、役員との協議のもと、改めて策定したい。 | B | B |
| | 教務課 | 【①効率的な学校運営】<br>【②協働的な教職員組織】<br>＜具体的方策＞<br>ⅰ採点システムでのクラスルームを利用したテスト返却について、他校での状況を調べ、本校での実施に向けての研究をする。<br>ⅱオルフィスの使用について、他校での状況も調べ、効率的な利用方法を研究する。<br>ⅲ教務課のリーダー会議の記録を翌日（火曜日）に作成して配布し、課内での共有を図る。 | R6 学校自己評価教職員肯定的評価<br>・「学校は心理的安全性が保たれていて、意見が言いやすい環境となっている」<br>＜項目変更により参考値R5「風通しの良い職場作りや働き方改革が進んでいる」教職員73.4%＞<br>4：75%以上<br>3：70%以上<br>2：65%以上<br>1：65%未満<br>R6 教職員　80.0%　達成基準4<br><br>・「学校は様々な教育活動にチームワークを意識して取り組み、各課や年次などの連携がとれている」<br>＜R5　教職員77.2%＞<br>4：80%以上<br>3：75%以上<br>2：70%以上<br>1：70%未満<br>R6 教職員　72.3%　達成基準2<br><br>・「学校は、教育活動のPDCAサイクルが回り、その改善が進んでいる」<br>＜項目変更により参考値R5「カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れ、教育活動のPDCAサイクルが回り、その改善が進んでいる」教職員70.9%＞<br>4：75%以上<br>3：70%以上<br>2：65%以上<br>1：65%未満<br>R6 教職員　64.6%　達成基準1 | ⅰ採点システムでのクラスルームを利用したテスト返却について、チェックマニュアルやミスが起きたときの対応等を他校の取り組みを集約していきたい。<br>ⅱオルフィスの使用について、他校での状況を可能な範囲で調べた。考査での使用は実力考査に限っていたが、第2回定期考査で試験的に使用を可能にし、印刷時間の短縮など好評な意見であった。<br>ⅲ教務課のリーダー会議の記録を翌日（火曜日）に作成して配布することで、課内の共有がはかれている。 | B | 【達成状況】<br>ⅰ百問線乱を利用した採点は行っているが、Classroomを利用した答案返却は行っていない高校もあった。（誤送信の危険性もあることから）<br>ⅱオルフィスの使用について、考査での使用は実力考査に限っていたが、定期考査まで使用を可能にしたことで、印刷時間の短縮につながった。<br>ⅲ教務課のリーダー会議の記録を翌日に作成して配布することで、課内の共有が図れている。<br><br>【課題と次年度への方策】<br>ⅰについて、ミスが起きないためのマニュアルの整備や導入時期の検討などに引き続き取り組んでいきたい。<br>ⅱについて、印刷や製本時間短縮につながっており、次年度も引き続き使用を可能にしていきたい。使用が集中する時間帯があり、渋滞してしまうことが課題である。<br>ⅲについて、引き続き、取り組んでいきたい。 | B | |
| | 生徒課 | 【②協働的な教職員組織】<br>＜具体的方策＞<br>ⅰ教職員にとっても「チーム倉敷南」を感じられる部活動の推進。<br>・自分の趣味や興味にあった部活動がある。<br>・生徒や同僚との交流の場としての部活動。<br>ⅱ課内の分掌業務の精選・効率化によって生徒と接する時間をつくる。<br>・各年次団との連携により、負担の偏りを減少し、チームとして取り組める。<br>・掲示板の活用による業務の見える化。 | | ・特に運動部で多くの教員が専門種目の顧問を持つことができている。そうでない顧問もいるので、顧問同士で下校指導の時などに生徒情報や意見を交換できるようにしたい。陸上競技部やハンドボール男子が上位大会に進出したり、部ではないが空手やレスリングで中国大会に出場したりした生徒もおり、旅費補助などで学校全体として支援することができた。<br><br>・葦岡祭の準備期間では生徒会係を中心に多くの生徒と議論することができた。スマホ使用についてやフィナーレの在り方など次年度への課題はあるが、教員間でも議論ができたことが成果の一つといえる。<br><br>・特別指導が4件あったが、生徒指導チームを中心に聞き取りなど分担して動くことができた。年次主任が生徒課を兼ねていることで、情報伝達の効率化につながった。教育相談との連携や保健室との連携も図れている。全体として負担は減っていないが、チームとして取り組めている。 | B | 【達成状況】<br><br>陸上競技部、棋道部、卓球部、ESS部が全国大会に出場した。学校全体で生徒の活躍を応援している雰囲気ができていた。他の部にとっても励みとなり、「チーム倉敷南」を意識して日々の活動が充実している。<br>生徒課内での情報共有だけでなく、教育相談会議等を通じて各年次団との連携を取ることができた。<br>掲示板の活用による業務の見える化も整備が進んだ。<br><br>【課題と次年度への方策】<br>部活動への負担感が増している現況において、よりよい部活動の在り方について考える。<br>生徒会執行部や部活動、委員会活動を通じて、より生徒の活動が活性化できるようにしたい。 | B | |

令和6年度の学校経営目標とその目標を達成するための具体的な取組(最終評価)

岡山県立倉敷南高等学校

| 学校経営目標 | 分掌 | 本年度の具体的な学校経営目標を達成するための課・年次内での具体的方策（教育活動） | 評価基準 | 中間自己評価<br>中間期の達成状況と今後の課題 | 中間評価 | 最終自己評価<br>年度末の達成状況・課題とその方策 | 総合評価 | 総合評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4<br>教員のウェルビーイングの向上 | 進路課 | 【②協働的な教職員組織】<br>＜具体的方策＞<br>・全教員対象の進路研修会や希望者対象の進路OJT研修を実施し、教員が自信をもって進路指導を行うことができる体制を整える。<br><br>・進路課会議の中で各年次の学力や進路指導の状況を丁寧に共有し、課題解決にむけて連携していく。 | R6 学校自己評価教職員肯定的評価<br>・「学校は心理的安全性が保たれていて、意見が言いやすい環境となっている」<br>＜項目変更により参考値R5「風通しの良い職場作りや働き方改革が進んでいる」教職員73.4%＞<br>4：75%以上<br>3：70%以上<br>2：65%以上<br>1：65%未満<br>R6 教職員　80.0%　達成基準4 | ・卒業生（48期）の進路報告会を4月に実施。3年間を見据えた進路指導のイメージを全教員に持たせることができた。また、7月には進路研修会を実施。3年次生の具体的な進路指導事例を用いたケーススタディおよび志望別の指導の方向性について情報提供し、生徒個々の学力分析に基づいた戦略的な進路指導法の研修を行った。今後も、時期に応じた情報提供および研修会を実施していく。<br><br>・課会議の定期開催により、年次を超えた指導の方向性のすり合わせおよび各年次の情報共有に努めている。 | B | 【達成状況】<br>教員研修は希望者対象を含め計5回実施した。進学指導の経験の少ない教員が多くなった中で、全体のスキルアップにつながっている。<br>進路課会議は毎週実施した。3年間を見通した進路指導方針のベクトル合わせを行うことができた。<br><br>【課題と次年度への方策】<br>来年度も引き続き教員のニーズに合わせた研修を実施していく。今年度の入試結果を基にPDCAサイクルを回し、進路指導プログラムの見直しを進めていく。 | B | B |
| | 探究課 | 【②協働的な教職員組織】<br>＜具体的方策＞<br>・各年次「総合的な探究の時間」の内容を活動ごとに振り返り、見直しをする。<br>　チームリーダーと各年次の担当者が連携して、次年度に向けて改善を図る。<br>・リーダー会の記録を課のメンバーにすみやかに配付し、情報を共有する。<br>・担当した業務の手順や資料を整理し、記録に残しておく。 | ・「学校は様々な教育活動にチームワークを意識して取り組み、各課や年次などの連携がとれている」<br>　＜R5　教職員77.2%＞<br>4：80%以上<br>3：75%以上<br>2：70%以上<br>1：70%未満<br>R6 教職員　72.3%　達成基準2<br><br>・「学校は、教育活動のPDCAサイクルが回り、その改善が進んでいる」<br>　＜項目変更により参考値R5「カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れ、教育活動のPDCAサイクルが回り、その改善が進んでいる」教職員70.9%＞<br>4：75%以上<br>3：70%以上<br>2：65%以上<br>1：65%未満<br>R6 教職員　64.6%　達成基準1 | ・各年次「総合的な探究の時間」の内容やこれまでの活動については生徒の振り返り、及び教員の振り返りができ、次年度の申送書を作成している。<br><br>・リーダー会の記録は会ごとに課のメンバーにすみやかに配付し、情報を共有している。 | B | 【達成状況】<br>行事ごとに会議で振り返りを行い、他分掌との連携が必要であったり、見落としがちな業務等についての記録を作成している。<br><br>【課題と次年度への方策】<br>コロナ後の取組として新たに復活させたものがある。日程や業務について、早い時期から検討を行い、より良いものにしていく。 | B | |
| | 学力向上委員会 | 【②協働的な教職員組織】<br>全教員が生徒の学力向上の前提となる授業力向上に努める。<br>＜具体的方策＞<br>・公開授業期間にお互いの授業参観を行い、自らの授業の改善につなげる。<br>・formsを利用し、授業見学後にお互い建設的な意見・感想を伝え合う。 | | 協働的な組織づくりに取り組んでいる。<br>＜具体例＞<br>・全員に必ず1回授業公開をしてもらうことで、教科の枠を越えて遠慮なく互いの授業を見て、参考にする雰囲気ができつつある。 | B | 【達成状況】<br>・今年度学校経営目標の重点目標の基で設定した「自律した学習者の育成」という全体テーマについて、教員間の共通認識が保たれ、全教員が同じベクトルで授業改善の取組ができた。<br>・全教員が公開授業をしたことで、例外を作らず、平等に取組に関わることができた。授業参観については1人1回以上を呼び掛けたが、結果として延べ127名がフィードバックを提出し、多くの教員が教科の枠を超えてお互いの授業を見る機会となった。<br><br>【課題と次年度への方策】<br>・学力向上委員会の取組を、各課、年次、教科等といかに有機的に連携して、生徒の学力向上につなげていくかが今後の課題である。<br>・また、今年度の取組を単体のものと考えず、継続的な授業改善・学力向上に活かしていけるよう、次年度の目標設定時に配慮したい。 | B | |
| | DX推進プロジェクト | 【①効率的な学校運営】<br>＜具体的方策＞<br>・DXハイスクール事業の主管分掌として、関係部署と連携し、滞りなく事業を遂行する。<br>・校務のDX化を推進する。(保護者連絡システムの導入、終礼連絡シートの改修、Wi-Fi等の環境整備　等) | | ・DXハイスクール事業については、申請書の内容をもとに、おおむね順調に遂行することができている。2学期には、生徒対象の講演会も予定されているため、準備を綿密に行い、生徒にとってよりよい経験となるように充実させていきたい。<br>・探究課と連携しながら、校務のDX化（保護者連絡システム、終礼連絡の自動化、生成AIの活用）を推進することができた。今後は、マニュアル等の整備を行い、次期担当者が円滑に引き継げるようにしていく。 | B | 【達成状況】<br>・DXハイスクール事業については、計画通りに予算を執行することができた。ただし、十分な活用ができていないので、次年度以降全体計画に基づき、活用していきたい。<br>・中間期までの取組に加えて、Googleカレンダーの自動登録化等の仕組みも整え、少しずつではあるが校務のDX化を推進することができた。<br><br>【課題と次年度への方策】<br>・DXハイスクール事業の目標や計画を教職員間で十分に共有できていない状況がある。年度当初に改めて目標や計画の共有を行い、関係各所と連携して、予算の執行や購入機器等の具体的な活用について研究・実践していく。 | B | |
| | 市民教育委員会 | 【②協働的な教職員組織】<br>全教職員が人権感覚を高め、互いを尊重した言動がとれるようになる。<br>＜具体的方策＞<br>・教育庁人権教育・生徒指導課による訪問研修によって、教員の人権感覚を高める。 | | ・教育庁人権教育生徒指導課による訪問研修において、生徒の人権を尊重したSOSの受け止め方などの対応等について研修を受けた。日頃の生徒対応等へ生かしていきたい。 | B | 【達成状況】<br>・県教育庁人権教育・生徒指導課による訪問研修や教育相談と連携した研修において、人権に関する理解を深め人権感覚を高める研修を実施した。<br>【課題と次年度への方策】<br>・次年度も引き続き教員研修を実施して、人権感覚を高める取組を行う。 | B | |